

夏目漱石と朱子学

「動」「静」を中心に

NATSUME SOSEKI AND DOCTRINES OF CHU-TZŪ

<motion> and <stillness>

余 炳 躍*

Many times it has been pointed out that Natsume Soseki's works are related to the thoughts of Lao-tzŭ and Chuang-tzŭ. In my analysis of "motion" and "stillness" seen in the works of Natsume Soseki, the traces of Chu-tzŭ' doctrines could be followed. They appear as expressions that directly make use of "motion" and "stillness" in his novels as well as in his "fragments" and "diaries". And this pair of ideas, in some cases, is part of the heroes' or heroines' thought. In the Third chapter of my paper I presented many examples of this pair of ideas that emerge in Soseki's works. In conclusion, "motion" and "stillness", the important pair of ideas in the doctrines of Chu-tzŭ, can be found in Soseki's thought.

*YU Bing Ye 同志社大学大学院。武漢大学大学院卒。幸田露伴の『渋沢栄一伝』の翻訳を出版の予定。

夏目漱石は、明治二十二年九月二十日付の正岡子規宛の手紙に次のように言う。

(略) 五絶一首小生の近況に御座候憫笑可被下候

抱剣聴竜鳴、読書罵儒生、

如今空高逸、入夢美人声、

第一句は成童の折の事二句は十六七の時転結は即今の有様に御座候字句は不相変勝手次第御正し被下度候云々（『漱石全集』第14巻 昭和60年11月22日 岩波書店 10頁）

「成童」は、「十五歳以上の少年」（貝塚茂樹等編『漢和中辞典』昭和41年1月25日 角川書店）を指す。十五歳と言えば、明治十四年、漱石が二松学舎に籍を置いた年である。その後、十六、七歳の時の漱石は「書を読みて儒生を罵る」ようになるのである。ともあれ儒学にたいしてのかつての関心を窺うことはできるだろう。

小宮豊隆によると、「漱石の家に保存されている二松学舎の免状は二枚ある。その一つには明治十四年（1881）七月の日付で『第三級第一課卒業』とあり、他の一つには明治十四年十一月の日付で『第二級第三課卒業』とある。」（『夏目漱石』昭和13年8月5日第2刷 岩波書店 81頁～82頁）また当時の二松学舎の課程内容を調査した佐古純一郎によると、「三級第一課 唐詩選、皇朝史略、古文真宝、復文。二級第三課 孟子、史記、文章規範、三体詩、論語。」（『漱石論究』1990年5月25日 朝文社 349頁～351頁）ということである。「漱石山房蔵書目録」中「漢詩漢文其他」には「論語集註 朱熹集註 一冊十卷」（『漱石全集』第16巻 昭和61年1月22日 岩波書店 751頁）という記載が認められるが、それを「その書（朱子が注をつけた『論語』——引用者注）は、元、明、清の時代、ひいては江戸時代には、国定の教科書となったため、最もひろく普及した。」（吉川幸次郎『論語』上 昭和44年9月1日 朝日新聞社「まえがき」VI頁）という証言と勘案するとき、少年時代の漱石が学んだ

『論語』が実は朱子の『論語集註』である可能性は十分考えられるだろう。また以下に掲げる漱石の小説の一文は、少なくとも漱石が『論語』を読んでいた事実を証明していると考えられる。

翌日も我々は同じ所に泊ってみました。朝起き抜けに浜辺を歩いた時、兄さんは眠ってゐる様な深い海を眺めて、「海も斯う静かだといいね」と喜びました。近頃の兄さんは何でも動かないものが懐かしいのださうです。その意味で水よりも山が気に入るのでした。(「行人」塵勞 三十三 『漱石全集』第五卷 昭和60年2月22日 岩波書店 711頁～712頁)

「水よりも山が気に入る」という表現には、『論語』雍也篇にある「知者楽水、仁者乐山。知者動、仁者静。知者楽、仁者寿。」(前掲書より引用 174頁)という章句の影響が認められる。そして「動」「静」という言葉を単なる状態の形容に用いず、「動かないもの」すなわち「静」というように、ある内容を含ませた表現になっていることも明らかである。

もともと漱石が所蔵しており読んだとも考えられる『論語』が、『論語集註』であるという事実を鑑みれば、引用した「行人」の一節に表れた『論語』の「知者楽水、仁者乐山」という章句の反映と同様に、「動」「静」の表現も『論語集註』の影響下にあると推定することは無理なことではない。事実、上記の『論語』の章句に対して朱子は以下のように注を付している。

知者は事理に達し、周流して、滞ることがない。水に似たところがある。だから水を楽しむ。仁者は義理に安んじて厚重で遷らない。山に似たところがある。だから山を楽しむのである。動静は体を以ていひ、楽寿は効を以て言ったのである。動いて括られない。だから楽しむ。静で常がある、だから寿いのである。(『四書集註』朱子学大系第7巻 明德出版社 昭和49年4月30日 115頁)

この引用に表れた「動」「静」という言葉を踏まえて上記の「行人」の引用の内容を考えると、一郎は蕩揺する海よりも「静」かな海を好み、海よりも泰然として「動」かない山を好む状態、すなわち「知者」であることよりも「仁

者」たらんとしていると読み取れるのである。

漱石文学は東西の様々な文学や思想を綯いあわせて成立しているのだが、従来指摘されることの多い禅や老荘思想の影響のほかに、朱子の思想の影響も見いだし得るのではないだろうか。

二

『中国大百科全書』哲学1巻（中国大百科全書出版社編集部編 1987年10月中国大百科全書出版社 169頁）のなかの「動」「静」欄によると、この概念は「宇宙論、或は本体論」の欄、「人性論、或いは修養論」の欄、及び「認識論」の欄という三つの項目に分けられているのである。小論では主に「人性論、或は修養論」としての「動」「静」、言い換えれば人生観としての「動」「静」を対象に、漱石における「動」「静」を考察していきたい。

まず、「動」「静」の概念を説く古代の思想流派には、主に老荘思想、魏晉玄学、そして朱子学がある。魏晉思想については、漱石がその小説、漢詩の中で引用したことはない。老荘思想については、漱石はかつて「老子の哲学」という論文を書いたことがある。その中で漱石は「玄」すなわち「道」について次のように述べている。

玄之又玄（絶対）
 { 静…平等故無名…故常無欲觀其妙
 { 動…万物之母故有名…故常有欲觀其繳

この引用では、漱石が「動」「静」をもって「玄」を解釈し、「道」、及び「玄」を理解している。『老子』の中では、しばしば「玄德」「玄同」「玄牝」などのように、「玄」という言葉で「道」を表現し説いているが、「動」「静」を以て「道」を解釈することはないのである。「根に帰るを静といひ、静を復命といふ」などとあるように、「静」を主張するところもあるが、しかしこれは老子の思想においては「動」「静」を超越する考え方で、「動」「静」を対概念として扱う態度ではないのである（大浜皓『朱子の哲学』1983年2月25日東京大学出版会 313頁参照）。

それではこの概念を漱石はどこから吸収したのであろうか。実は「動」「静」は対概念として、朱子学において一つの重要な位置をしめる概念である。朱子学における「動」「静」の重要な位置について、島田虔次氏は次のように述べている。

周濂溪の中国思想史における功績の第三のものは、「静」の強調である。がら「動・静」というのは、「本・末」や、「内・外」と同じく中国哲学に独特の範疇で、その原型として注目すべきものは『礼記』楽記篇の次の文章である。

人生マレテ静ナルハ、天ノ性ナリ。物ニ感ジテ動クハ、性ノ欲ナリ。物至リ知知リ、然ル後ニ好悪形ル。好悪、内ニ節ナク、知、外ニ誘ワレ、躬ニ反ル能ワザレバ、天理滅ス。ソレ物ノ人ヲ感ズルコト窮マリナク、人ノ好悪節ナキハ、則チ是レ物至リテ、人、物ニ化セラルルナリ。人、物ニ化セラルレバ、天理ヲ滅シ。人欲ヲ窮ムルナリ。

つまり「楽記」の説をおおづかみに表示すれば、

内・静・性・知・天理

外・動・欲・物・人欲

ということになるであろう。…とにかく儒教の經典たる『礼記』の、人間は「静」であることを本質態とする存在であり、物に感じて、つまり外から物に働きかけられてはじめて「動」というこの説は、すでに宋学の先駆者といわれる唐の李翱の『復性書』の中心テーマであったが、いま濂溪においてそれは「無欲ナルガ故ニ静」（『太極図説』への周濂溪の自注）という決定的な表現をもってあらわれているのである。以後、宋学の主流が「静」であったこと、その流れのうちから「敬」が生まれ「未発の中」がうまれてくるであろうこと、又その静はけって動を排除した静でなく、動を内に最大限に含むつつの静（いわゆる「至静」）として、やがて朱子にみられるごとき美しい論理のあやが織られることになるであろう…（『朱子学と陽明学』1972年2月21日 岩波新書 36～37頁）

つまり、「動」「静」は『礼記』の「人生マレテ静ナルハ、天ノ性ナリ。物ニ感ジテ動クハ、性ノ欲ナリ。」という章句に由来するのであり、「静」は人の生まれながらの「性」を意味し、その「性」が欲望によって変化することが「動」である。

そして宋学の集大成者朱子も、次のように説くのである。

心を水にとたとえると、性は水の理である。性は、水が静かな時に確立するものであり、情は、水が動く時に行われるものである。欲になると、水が流れて、洪水になったのである。（『朱子語類』朱子学大系第6巻 明德出版社 昭和56年10月25日 66頁）

つまり「静」の状態にあるときの心は「性」と一致しているが、心が「動」と「静」という根本の性質を失う、ということである。

漱石はこの考え方を沢庵和尚の書物から勉強したらしい。「漱石山房蔵書目録」中「語録道話其他」に、「沢庵和尚全集』阿心庵雪人編 明治三十一年上田屋」とあるが、その巻所収の「沢庵法語」には次のような記述が認められる。

性より起り心に二つの差別ある事、水動いて浪となるがごとく性動いて心となるは、心が二つになるなり、性より生ずる心が性のごとくなれば、聖人の心なり、しかるを性にそむいて血氣に従へば此心悪人の心となる也、…心は性の子なり、性はすぐなるもの也（阿心庵雪人編 『沢庵和尚全集』上田屋書店 明治31年6月10日再版 11頁）

「性」（「静」）が「動」いて心が生じるが、その心には「性」の性質を受け継いだ心と「性」に背いた心とがある。私見によればこのような考え方に対する漱石の興味は、「吾輩は猫である」の中に「求放心」という言葉の引用となって表れてくる。

「夫だから困る。決してそんな造作のないものではない。孟子は求放心と云はれた位だ。邵康節は心要放と説いた事もある。又仏家では中峯和尚と云ふのが具不退転と云ふ事を教へて居る。中々容易には分らん」（九 『漱石全集』第1巻 昭和59年10月22日 岩波書店 363頁）

「求放心」とは、『孟子』（告子篇上）に「人、鶏犬の放つれば、これを求むるを知るも、放心ありて求むるを知らず。学問の道は他なし。その放心を求むるのみ。」（今里禎訳『孟子』 昭和47年3月10日11刷 経営思潮研究会 249頁）とあるのに基づく。「漱石山房蔵書目録」に『孟子』の書名が認められないことから、「吾輩は猫である」の注釈にも述べられているように、ここでの漱石の引用は沢庵の「不動智神妙録」によるものと思われる。漱石も所有している『沢庵広録』によると、「求放心／と申すは、孟子が申したるにて候。放れたる心を尋ね求めて我身へ返せと申す心にて候。」（秋庭宗琢編 明治39年1月6日 森江佐七 17頁）とある。この「求放心」の考え方は、上述した「動」「静」の考え方と一致する所がある。朱子も「求放心」については、次のように述べているのである。

学ぶ者は放逸した心を取り戻さねばならない。それでこそこの性が善であることがわかる。人の性はすべて善であるが、みずからその心を放逸するために、遂に悪に流れる。…日常生活の中で、常にわが身で考察し、存養の工夫を続けて行けば、自然に成熟する。

学者須是求放心。然後識得此性之善。人性無不善。只緣自放其心。遂流於惡。…動靜日用。時加体察。持養久之。自然成熟。（『朱子語類』 朱子学大系第6巻 明德出版社 昭和56年10月25日 96頁～97頁） 漱石は「こころ」の中で、「先生」に次のように述べさせている。

…悪い人間といふ一種の人間が世の中にあると君は思っているんですか。…平生はみんな善人なんです、少なくともみんな普通の人間なんです。それが、いざといふ間際に、急に悪人になるんだから恐ろしいのです。だから油断が出来ないんです。」（上 二十八） 漱石全集』第6巻 昭和60年3月22日 岩波書店 77頁）

人間の「性」は善であるが、欲望に流されることによって悪心を起こし「性」を失うという点で、「先生」のこの人間観と朱子学の考え方の間には相似性があると認められるのである。つまりここに漱石と朱子の接点が見いだされたの

である。

三

それでは実際に漱石の文章中で、「動」「静」観がどのようにあらわれているのであろうか、以下具体的に提示してゆきたい。まず彼は「断片」の中に次のように書いたことがある。

○静をあらわすものはポテンシアリチーであるポテンシアリチーは何に変化するかわからない。静変じて動となるとときアクチギチーとなる。アクチギチーは盛なると同時に限られて居る。其無能を発表する其微弱なる事を証明する。英国の文学は此動の尤もダラシナキものなり。浅墓なるものなり。(断片——明治三十八年十一月頃より明治三十九年夏頃まで)『漱石全集』第13巻 昭和60年10月22日 岩波書店 165頁)

漱石はまた「草枕」の那美を形容するにあたって、次のように「動」「静」について述べている。

…動と名のつくものは必ず卑しい。運慶の仁王も、北斎の漫画も全く此動の一字で失敗して居る。動か静か。是がわれ等画工の運命を支配する大問題である。…

元来は静であるべき大地の一角に陥欠が起こって、全体が思はず動いたが、動くは本来の性に背くと悟って、力めて往昔の姿にもどらうとしたのを、平衡を失った機勢に制せられて、心ならずも動きつづけた今日は、やけだから無理でも動いて見せると云はぬ許りの有様が——そんな有様がもしあるとすれば丁度此女を形容する事が出来る。(三 『漱石全集』第2巻 昭和59年11月22日 岩波書店 421頁～422頁)

この引用文中には、漱石の「動」「静」についての認識がよく現れている。「動」よりも「静」のほうが尊い、「動」は「本来の性に背く」、したがって「本来の性」は「静」なるものである。そして「動」「静」は対概念であり、「静」から「動」への変化はやむ得ないことだと漱石は考えているのであろう。

また「虞美人草」にも「動」「静」観の反映した章句が認められる。哲学者

の甲野が、彼に思いを寄せる糸子に「藤尾が一人出ると昨夕の様な女を五人殺します」と述べた後に続く場面である。

「あなたは夫で結構だ。動くと変わります。動いてはいけない」

「動くと？」

「え、恋をすると変わります」(十三 『漱石全集』第3巻 昭和59年12月18日 岩波書店 249頁)

ここに、すでに述べた「静」から「動」に変化することが問題視されていると見て取れるのである。

さらに明治四十三年十一月二十日掲載分の「思い出す事など」で、漱石は「動」「静」について以下のように記している。

始めて読書欲の萌した頃、東京の玄耳君から小包で酔古堂剣掃と列仙伝を送って呉れた。…

…然し挿画よりも本文よりも余の注意を惹いたのは巻末にある付録であった。…病中の余にはそれが面白かったと見えて、其二三節をわざわざ日記の中に書き抜いてゐる。日記を検べて見ると「静これを性となせば心其中にあり、動これを心となせば性其中にあり、心生ずれば性滅し、心滅すれば性生ず」といふ様な六づかしい漢文が曲がりくねりに半頁ばかりを埋めてゐる。…夫程衰弱の劇しい時にですら、わざわざと斯んな道経めいた文句を写す余裕心が心にあったのは、今から考えても真に愉快である。(六 『漱石全集』第八巻 昭和60年5月22日 岩波書店 286～289頁)

翻って明治四十三年九月二十一日の日記を見てみると、「○(大通経より?) / 静為之性心在其中矣動為之心性在其中矣心生性滅心滅性生現如空無象湛然円満」(『漱石全集』第13巻 昭和60年10月22日 岩波書店 544頁)という記載が認められる。漱石が興味を覚えて日記のなかに書き抜いたこの一文は、次のような意味である。人間の「性」が「静」なる状態にあるとすれば、「心」も自然に「静」なるものとなる。これに対して、もし人間の「心」が欲望などに「動」かされると、「性」も自然に「静」なる状態を失って、「動」なるものに

なるというのである。要するに「性」は「静」を以て本来の状態とするが、心
がその状態を背く危険性がある。朱子学者の中でこのような説を主張するのは
程頤（初期）と胡宏がいる。胡宏は、「一方『性は動かざること能わず、動く
こと則ち心なり』と説き、心は動くもので、静ではないことを説明するが、ま
た、性にいたる心は『寂然不動』である」（蒙培元『中国心性論』1990年4月
台湾学生書局 356頁＊ 論者翻訳）と説明するのである。すでに引用した
「草枕」中の「動」「静」観はこのような見方と通いあうものと認められるだろ
う。

ちなみに『漱石全集』「思ひ出す事など」の注解によると、「列仙伝 元來漢
の劉向撰と伝えられる二巻があるが…、ここでは還初道人の編になる『列仙伝』
四巻をさすらしい。三巻までに五十五人の仙人の伝記を集め、絵入り本として
刊行されている。」とある。また別記の注解には、「『列仙伝』の巻四は『長生
詮』と称して不老長生に関する言葉が集めてある。」とある。ここにいう還初
道人とは明代の道士であり、本名は洪応明と言う。彼の編集した『列仙伝』の
巻末にある「長生詮」（「長生詮経」とは、もともと同じ明の万歴にあたる時
に編纂された『統道蔵』中の「清揺墟経巻第三」のことである。そしてこの
「長生詮」の中に「大通経」があり、その冒頭の章句が漱石の引用したものな
のである。

以上の考察から、次のことが明らかになった。漱石が朱子学から影響を受け
たと言明した文章は認められないが、漱石の思考方法の中には「動」「静」と
いう朱子学思想の重要な対概念が認められる。そしてそれが「断片」「日記」
はもちろん小説の中にも、「動」「静」を直接用いた表現となって表れていたの
である。またこの対概念は、時として主人公達の思想の一部を構成するものとも
なっていた。この意味で、「動」「静」は看過すべからざる概念として、今後の
漱石文学の研究においては朱子学思想の影響の事実と共に、重視されるべき

ものであると考える。

漱石の思考方法に対する禅の影響を指摘する声は多く、その一方で江藤淳による老荘思想と漱石の関わりを指摘する説（『朝日小事典 夏目漱石』昭和52年6月）や「『老子』の場合を越える『荘子』との深い関連の跡」に着目した論（重末泰雄『漱石と老荘・禅覚え書』三好行雄平岡敏夫等編『講座夏目漱石』5 昭和57年4月15日 有斐閣 95頁）などが、従来の漱石と中国思想の主要な関係を明らかにしてきた。しかし、加茂章は「漱石の思想は禅に特定できない。宗教的禅に捉われず儒教的老荘的天でもあり、ジェームスのベルグソンの西田哲学的純粹直観でもあり、それらを総合した独自の無我の世界を探る必要がある。」（『漱石と老荘・禅』『国文学』第23巻6号 学燈社 47頁）とし、作品を「広汎な思想の総体」として捉えながら「もちろん、作品のどの部分、どの語句がどの思想の影響を受けたものかということは特定可能であり、今後も続けられるべきであろう。」（『儒学と老荘』三好行雄編『別冊国文学 夏目漱石事典』平成2年7月10日 学燈社 163頁）と述べている。小論のささやかな試みもまた、漱石の文章作品中に朱子学の思想の痕跡を確認することにあつたことは言をまたない。

討議要旨

北海道教育大学の渦沼誠二氏より、漱石にとって朱子学は「禅」と一体になっている所があるのではないかとの質問があり、発表者は「静」と「動」という対概念は、宋学の中のものではないか、と答えられた。

シンガポール大学の林連祥氏から、『こころ』の奥さんの名前が「静」であることに注目すべき旨、助言があった。

宇都宮大学の宮下健三氏より、＜静＞＜動＞の対概念で考えるという方法についての疑問が提出された。